

(654) オーステナイト鋼の高温変形挙動と組織におよぼす大圧下加工の影響

日本钢管(株)中央研究所 ○新倉正和 高橋和秀 大内千秋

1. 緒言 ¹⁾既報において、広範囲の加工熱処理条件を再現できる加工熱処理シミュレータを開発し、これを用いた実験により、大圧下加工が低合金鋼の熱間γ粒径の微細化と直接焼入れ材の高靱化に有効であることを明らかにした。本報告では大圧下加工の特徴を更に明確にするために、オーステナイト系高合金鋼を用いて、1パス大圧下加工の高温変形挙動およびγ組織変化におよぼす影響について調査するとともに、大圧下加工の一環である熱間押出しプレスでの結果と比較検討した。

2. 実験方法 供試材は現場溶製SUS304L鋼と42%Ni鋼(42Ni-21Cr-3Mo鋼)であり、予備圧延により10t~90tの試験片を得た。大圧下加工は150トン加工熱処理シミュレータを用いて、加熱温度1000~1250°C、加工温度950~1200°C、歪速度 $\dot{\epsilon}=1\sim40\text{s}^{-1}$ 最終加工板厚7mm、圧下比2~13($\epsilon=0.7\sim2.6$)、1パスの条件で実施した。大圧下加工の際、表面潤滑剤としてガラス潤滑剤を試験片表面に塗布した。加工後空冷、または0.5~40s放冷後焼入れを行い、γ組織のミクロ観察を行うとともに、機械的性質を調査した。また同一鋼種を用い、実機熱間押出しプレスにて、加熱温度1050~1200°C、押出し温度1000~1150°C、押出し比10、製管寸法10t×100ODの条件にて熱間押出しを実施し、加工熱処理シミュレータでの結果と比較検討した。

3. 実験結果

(1) 圧下比5以上の1パス大圧下加工により再結晶組織の得られる加工温度領域は低温側に拡大し、304L鋼の場合950°C、42Ni鋼の場合1050°Cにおいても加工後20s以内に再結晶が完了する。(図1)加工温度の低下により再結晶γ粒径 d_γ の微細化がなされ、304L鋼で約10μ、42Ni鋼では約15μの細粒組織が得られる。加工後0.5s後の d_γ は実験式 $d_\gamma = 60 \cdot \epsilon^{-0.5} \cdot Z^{-0.1} \cdot d_0^{0.5}$ によって整理される。ここでZ:Zener Hollomonパラメータ、 d_0 :初期γ粒径。

(2) 大圧下加工の変形応力 σ は、初期に加工硬化を示した後、 $\epsilon \geq 0.5$ の領域で飽和する傾向を示す。これは、加工熱による温度上昇に伴う軟化と、高歪域における動的復旧過程に起因すると考えられる。

(3) 大圧下加工の際、加工熱発生による大きな温度上昇が生じ、加工中の軟化・動的復旧および加工後の静的再結晶を促進していると考えられる。温度上昇 ΔT の大きさは、実験式 $\Delta T \approx 0.8 \sigma_{\epsilon=1} \epsilon / JC\rho$ によって整理される。ここで、J:熱の仕事当量、C:比熱、ρ:密度。

(4) 実機熱間押出しプレスにおける実験において、 d_γ および ΔT は加工熱処理シミュレータによる予測結果と一致した。また押出し圧力Pとシミュレータで実測された $\sigma_{\epsilon=1}$ の間に、Hughes et al²⁾が認めた次式がほぼ成立した。

$$P = 1.34 \sigma_{\epsilon=1} \ln \delta, \text{ 但し } \delta : \text{押出し比}$$

1) 新倉他:鉄と鋼, 70(1984), S707

2) K.E.Hughes, et al: Met. Technol., 1(1974), p. 61

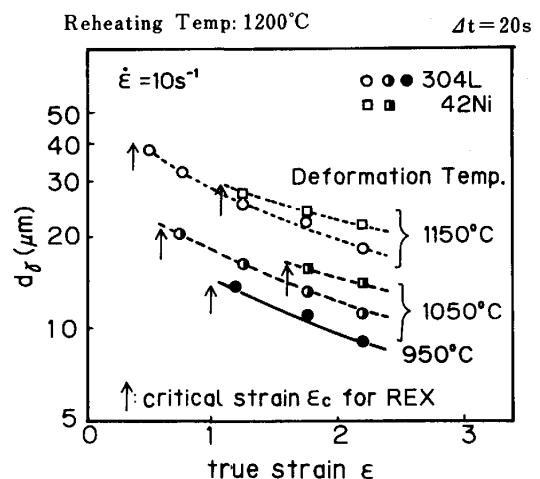


Fig.1 The influence of high reduction working on the recrystallized γ grain size

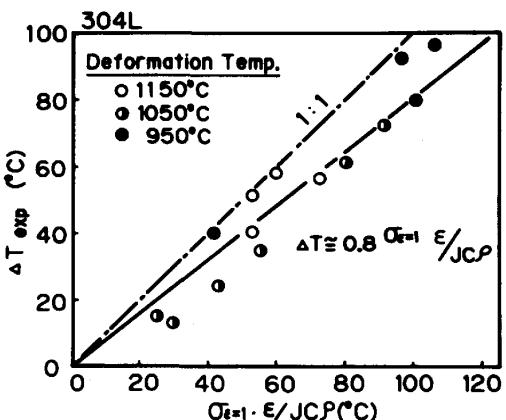


Fig.2 Temperature increase of the sample by high reduction working